

## 編集後記

今年度の沖繩調査は、例年同様、本学生涯学習講座「知りた  
いっちゃ沖繩 行きたいっちゃ沖繩」の受講生と行動をともに  
した。今回の訪問先は、芭蕉布の里として知られる沖繩本島喜  
如嘉の「芭蕉布会館」、山原の「大石林山」、辺戸岬の「祖国復  
帰闘争碑」、奥の共同売店、そして古宇利島であった。

とりわけ、喜如嘉の芭蕉布会館では、糸芭蕉の芋倒しから芋  
剥ぎまでの作業を見学し、芋積みと呼ばれる作業を実際にやっ  
てみるという貴重な体験をした。

芋積みの体験会場は会館の二階である。二階へと上がった筆  
者たちは、機を織り、染色作業をする方々のなかに、静かに芋  
積みを行っている一人の女性を見た。平良敏子さんである。平  
良さんは喜如嘉の芭蕉布の無形重要文化財保持者、いわゆる人  
間国宝である。一九二〇年生まれの敏子さんは二〇一八年で  
九十八歳になるが、芋積みを行うその手の動きは正確で、いさ  
さかのぶれもない。手のつやも驚くほどよく、九十八という年  
齢を感じさせなかった。筆者はもちろんのこと、今回のツアー  
に参加した受講生の誰もが芋積みを行う敏子さんの手の動きに  
見入っていた。そんな筆者たちのことなど目に入らないという  
ように、敏子さんは静かに芋積みを続けた。「見入る」という  
言葉のとおり、いつまでも見続けていたいと思える光景であっ  
た。

さて、これまで長く本共同研究で沖繩研究に携わってきた土  
屋純（現代ビジネス学科）が本学を離れることになった。残念で  
はあるが、新天地でも沖繩研究を続けたいという希望があるよ  
うなので、今後も協力をお願いしたいと思う。同時に、新しく  
栗原健（一般教育部）が共同研究に参加してくれることとなっ  
た。今回のツアーにも参加してくれて、沖繩研究への手ごたえ  
をつかんだようである。今後の活躍が期待できる。

来年度については、すでに研究対象を西表島にすることが決  
まっている。本号において、今林が「西表島に関する覚書」を  
まとめたのにはそうした背景がある。研究論文というものでは  
ないが、今後の西表島研究の出発点になれば幸いである。

（文責 今林直樹）